日刊　産業新聞
2016年（平成28年）　2月1日　月曜日　日刊

鉄のふしぎ？博物館 ■41

『鉄銭の初め』

衣川製鎖工業・衣川良介社長

『寛永通寶』が初めて作られたのは寛永13年（1636年）で、その一文銭は古寛永と呼ばれています。その後、寛文6年（1668年）には背に文の字がある『文銭』が江戸、亀戸で生産されました。この一文銭は綺麗な文字、形のものが多く人々の評判が良かったのです。そのため以前から使われていた中国からの渡来銭は使用禁止令の影響、寛文10年（1670年）もあり姿を消しました。

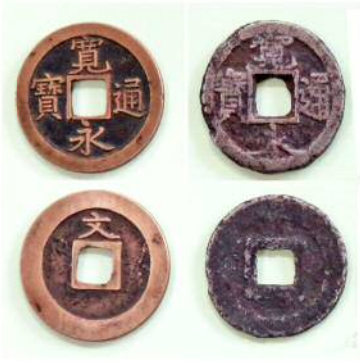
江戸時代初期は銅の生産量が大幅に増加しました。そして、我が国での本格的な通用銭『寛永通寶』は順調に世の中へ浸透してゆきました。しかし徐々に、銅不足が深刻になり青銅一文銭の鋳造は苦境に立たされます。元は直径が25ミリ、重さが約3・6グラムの文銭でしたが、直径が23ミリ厚みも薄くなり重さが2・3グラムと小さな一文銭まで発行されました。しかし根本的な解決策にはならず、約100年後、元文4年（1739年）に鉄一文銭が発行されたのです（写真①参照）。

青銅や真鍮で出来た『寛永通寶』は中心に四角い棒を通し、ロクロで回して外周を削り、すべすべした側面にすることができます（平成27年11月9日記事参照）。しかし、鉄一文銭の材料は、砂鉄と木炭によりたたら製鉄で作られた『白銑（はくせん）』で、非常に硬く、江戸時代の技術では外周を綺麗に削る刃物がなく、結果的には鋳っぱなし状態でした。この鉄一文銭はサビが出る、財布が破れるなど苦情が多く評判の悪いお金でした（写真②参照）。

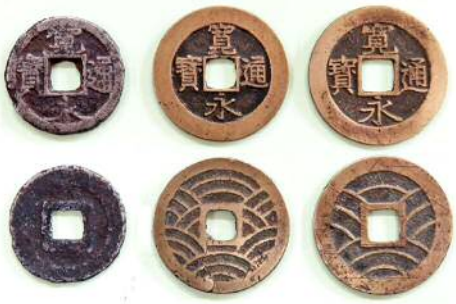
その結果、最初に発行された時は青銅銭と同じ一文の価値でしたが、だんだんと交換比率が悪くなり、鉄銭十文と青銅銭一文が同等とされた時代もあったようです。私でも、商品代金として十文頂くのであれば、写真左の文銭10枚が良いです。

あまりの悪評で八方ふさがり、この状況の打破に知恵者が登場しました。後に勘定奉行に出世した川井久敬です。真鍮（しんちゅう）四文銭の発行を提案したのです。明和5年（1768年）当時、深川の銀座は銀貨の在庫が大量になり、仕事が無くなりました。その銀座で、一文銭を鋳つぶし亜鉛を加えて真鍮の四文銭を作り、背面に川井家の家紋の波を描きました。ウコン色に輝くこの銭貨は好評を得ました。大ざっぱに言うと一文銭10枚から四文銭5－6枚出来、2－3倍の価値を生む計算です。その成分は銅68％、亜鉛24％、鉛など8％、重さは5・2グラム。発行初年は二十一波のものでしたが鋳造が難しく、翌年（1769年）からは簡略化した十一波に変更されました（写真③参照）。ちなみに、この真鍮四文銭には磁石につくものが多くあります。私は鋳つぶした一文銭の中に鉄が含まれていたと考えています。

①鉄一文銭



②文銭（左、一青銅）
鉄銭（一文銭）



③一文銭（左、鉄）21波（中）、
11波（右、四文銭）

日刊産業新聞　16・2・1

画像はカラーと交換しています。